

## 第4章 皇太子明仁への教育方針

本章は、従来余り注目されてこなかった天皇明仁の幼年時代の教育内容の変遷について検討を行い、教育担当者達が「象徴天皇制」をどのように明仁に教えようとしたのかを考察する。

天皇明仁は先述したように、一般的に日本国憲法への親和性の高い人物であると認識されている。彼自身がどのように「象徴」という概念を教育されてきたかを考察することは、象徴天皇制の形成過程を考える上で有効な示唆を与えることになるだろう。もちろん、教育方針と実際の天皇明仁の思想形成とは完全に合致しないと思われるが、教育担当者の「象徴」認識を考察することによって、「象徴」という概念がどのようにして内実を作られていったのかを考えることが可能となるだろう。

本章は、対象時期を皇太子の誕生から成年を迎える1951年頃までに限定して論じる。成年後の教育については、教育の責任者となって皇太子に多大な思想的影響を与えた小泉信三の象徴天皇制論を論じる際に述べてみたい(第5章)。

まず(1)では、軍国主義の下で皇太子明仁がどのように教育をされていたのかについて、学習院での教育内容との関係で論じる。(2)では、敗戦による情勢の変化の中で、皇太子教育の方針がどのように変化していったのかを考察する。

### (1) 軍国主義下における皇太子教育

#### ・親子別居

皇太子明仁は、1933年12月23日に昭和天皇と香淳皇后の長男として誕生した。これまで、天皇夫妻の子供には女兒が四人続いていたため、待望の男児であり、全国的な祝賀で迎えられた。この年は、国際連盟からの脱退表明を行うなど、国内の軍国主義感情が高まっていった時代である。まさに皇太子の幼年期は、日本に軍国主義が吹き荒れた時代と重なっていた。

皇太子は皇后宮職の管轄に入ったため、養育の責任者は広幡忠隆皇后宮大夫(侍従次長)となった。皇太子の教育方針は、広幡を中心に牧野伸顕内大臣、湯浅倉平宮相などが検討を行った。昭和天皇は、皇太子を、しばらくは内親王と同じく、宮城内の呉竹寮で育てたかったようである<sup>1</sup>。しかし、元老西園寺公望は、すでに1934年6月9日に「今日、よく親が子供を自分の思ふ通りに、わけも判らずに教育しようと思ふことは非常な間違で、人のおおの天性といふものがございますから、それをよく見極めて、その特長を伸ばして行くことにお気をつけにならなければなりません」<sup>2</sup>と釘を差し、親子別居を主張した。皇太后も皇太子は天皇個人の子供ではないとして反対した<sup>3</sup>。

1934年10月31日、木戸幸一内大臣秘書官長は西園寺に「御誕生御一年後、次の御誕生日迄の間に方針を決定解決すること、赤坂離宮にてご生活のこと等を決定したる」<sup>4</sup>と話し合っており、親子別居はすでに既定路線になっていた。1935年3月30日に牧野が湯浅との話し合いで、「可成早く満三ヶ年に御達し前に御別居被遊、御就学の関係を慮ばかり赤坂離

<sup>1</sup>『朝日新聞』1952年11月10日朝刊。広幡忠隆元皇后宮大夫の回想。

<sup>2</sup>原田熊雄述『西園寺公と政局』第3巻、岩波書店、1951年、329-30頁。

<sup>3</sup>吉田伸弥『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』読売新聞社、1991年、32頁。

<sup>4</sup>木戸幸一『木戸幸一日記』上巻、東京大学出版会、1966年、366頁。1934年10月31日。

宮附近に別殿御設備相成、御居住御願ひする事」<sup>5</sup>で合意し、赤坂に仮御所を建設することが決まった。

また、皇太子を養育する傳育官の人事として、皇太后（貞明皇后）が納得する人であり、「永久性に富む比較的年若かの人格者」を選ぶべきであるとし、具体例として、田沢義鋪貴族院議員、野村吉三郎海軍大将、西義一陸軍大将の名があげられた<sup>6</sup>。その後、9月20日に湯浅が牧野の下を訪れ、傳育官に昭和天皇の教育に携わった杉浦重剛の弟子である高松宮別当の石川岩吉を推薦することを打診し、牧野は「殊に大宮様の御覚え悪からず」として了承した<sup>7</sup>。そして、1936年4月10日に首席傳育官に石川が就任した。翌年3月29日、赤坂離宮に東宮仮御所が完成し、皇太子は傳育官達と共に移り住んだ。

傳育官達は、東京女子高等師範教授の倉橋惣三をよび、毎週水曜日に幼児教育の講義を受けていた。その内容は、たくましい人間に育てるには、出来る限りかまわずにのびのびと育てた方がよいとしたものだった<sup>8</sup>。広幡が那須に行ったときに、池にはまっていた皇太子を誰も助けようとしないうるを問うたところ、「なあに、ご自分であがってこられるから心配はいらぬ」と言われたという<sup>9</sup>。しかし、実態としては過保護な扱いを受けていた。当時侍医であった佐藤久は次のように話している。

ちよっと風邪をひいても心配し、一寸泣いても何処か痛いんじゃないか、治りがわるければ医者が変わるんじゃないかと自然神経質になりますよ。しかし両陛下は御養育に関係のある者達に安心してすべてをお任せになっていられました。それだけ側近の人達の責任は非常に重く心配のあまり、いけないとは皆思い乍らも自然神経質に陥り易い、消極的になり易い、事勿れ主義にならざるを得なくなる、今となつては何とでも無責任の批評はいくらでも出来るが当時の空気というものは、そんな生やさしいものではなかったのですから、かけがえのないお一人なんですから・・・<sup>10</sup>。

いくら「構わず」といえ、やっとの事で生まれた跡継ぎの教育に携わる者達は、並のプレッシャーではなかつたろう。

また、その過保護さは女官に典型的に現れた。藤樫準二はこのころのことを「御幼少時代は女官達が"日嗣皇子"として大事に大事に羽根布団でくるんでお育てする様な有様であった」と述べている<sup>11</sup>。石川によれば、自分が赴任した際には皇太子の周りには男性がいなかったという<sup>12</sup>。朝や夜などの身のまわりの世話は、全て女官がしており、傳育官は口を出せなかつた<sup>13</sup>。傳育官達は皇太子があまりにも無菌状態におかれていることに不安

<sup>5</sup>牧野伸頭『牧野伸頭日記』中央公論社、1990年、626頁。

<sup>6</sup>前掲『牧野伸頭日記』625-626頁。

<sup>7</sup>前掲『牧野伸頭日記』654頁。

<sup>8</sup>東園基文「幼稚園から初等科御卒業まで」妙義出版社出版部編『立太子記念御写真帖 皇太子殿下』妙義出版社、1952年、46頁。女官の伊地知ミキによれば、倉橋の下で研究を終えた保母経験のある人が出仕として仕えていたという。伊地知ミキ「御幼少時代にお仕えて」前掲『立太子記念御写真帖 皇太子殿下』36頁。前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』41頁。

<sup>9</sup>広幡忠隆『頭陀袋』日本海事振興会、1961年、89頁。

<sup>10</sup>佐藤久「いゝ方が皇太子にお生まれになりました」前掲『立太子礼記念御写真帖 皇太子殿下』17頁。

<sup>11</sup>『毎日新聞』1952年11月10日夕刊。藤樫準二毎日新聞記者のコメント。

<sup>12</sup>石川によれば、「その時大奥の婦人の他男子職員は私一人でありましたが御五歳の時に若い傳育官が数人になったという。『神社新報』1948年12月20日。

<sup>13</sup>橋本明『平成の天皇』文藝春秋、1989年、197頁。

を覚えており、現実に初等科入学直後は風邪を引き続け、夏休みまでほとんど学校に通えない有様であった<sup>14</sup>。

その後、傅育官達はできる限り体力を付けさせようと努力し、戦争末期の疎開の際に女官の随行を止めさせ、皇太子は学校での体育とは別に、毎朝体操や駆け足、剣道などを側近達と一緒にいったという<sup>15</sup>。しかし、皇太子育成のプレッシャーは、皇太子が「現人神の子供」という立場を失うまでは軽減されることはなかったと思われる。

### ・学習院長の人選

皇太子の教育担当者を誰にするかは、生後すぐから大きな問題となっていた。そして、学習院初等科への入学は昭和天皇と同様に既定路線であったため、学習院長の人選も早くから行われた。その理由は、皇太子の初等科入学までに、学習院の綱紀肅正の必要性があったためである。当時の学習院教授古賀軍治によれば、学内では教員の威令がなく、特に校友会である輔仁会の活動に対し、教員が指導監督できない状態であったという<sup>16</sup>。

そこで松平恒雄宮内大臣は、1936年5月6日に元老西園寺公望の秘書である原田熊雄に対し、学習院の将来への憂慮を表明し、院長として野村吉三郎の起用を示唆した<sup>17</sup>。翌年3月に木戸幸一宗秩寮総裁は松平に対し、学習院長に野村を起用するための交渉を行うことを勧めた<sup>18</sup>。そして野村は松平の要請を受諾し、4月に学習院長に就任したのである。野村は輔仁会規則の改正、初等科の英語教育の廃止と心身の鍛練の重視などを行い、「乃木式教育の復活」を目指して院内刷新を図ろうとした<sup>19</sup>。

しかし、ルーズベルト米大統領とも親交のある野村を、当時の社会状況は放っておかなかった。すぐに、駐米大使に起用しようとする動きなどが起こり<sup>20</sup>、1939年9月14日、阿部信行首相兼外相から、ヨーロッパでの第二次世界大戦勃発による情勢に対応するために、専任の外相への就任を要請された。野村は皇太子入学一年前に院長が代わるべきではないとして一度は拒否するが、海軍長老の鈴木貫太郎、岡田啓介、米内光政は外相就任を強く勧め、また昭和天皇も許可したので、野村は急遽学習院長を辞任することになった<sup>21</sup>。後任には同じ海軍の山梨勝之進大將が就任した。野村が外相に就任した9月25日の前日には、すでに海軍から湯浅倉平内大臣に山梨を推薦するとの希望が出されており、原田や米内も賛成している<sup>22</sup>。また山梨自身は松平宮相と米内に推薦されて海軍を代表して就任したのちに回顧しており<sup>23</sup>、海軍からの登用を前提にしていたことは間違いないと思われる。

ここで野村、山梨といった院長人選から、当時の天皇及び天皇側近の皇太子教育の考え

<sup>14</sup>前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』59頁。

<sup>15</sup>1944年7月に傅育官になった黒木従達によれば、今までは女の人が世話をしていたために「どことなくおっとりした少年」だったが、いずれは少尉任官があるので、本格的に鍛錬をしようとしたとのことである。「日光の皇太子さま—陛下の周辺—その三」読売新聞社編『昭和史の天皇』第5巻、読売新聞社、1981年、68-69頁。

<sup>16</sup>古賀軍治「野村院長を敬慕して」野村忠編『追悼野村吉三郎』私家版、1965年、53-54頁。

<sup>17</sup>原田熊雄述『西園寺公と政局』第5巻、岩波書店、1951年、65頁。

<sup>18</sup>木戸幸一『木戸幸一日記』上巻、東京大学出版会、1966年、548頁。

<sup>19</sup>学習院編『学習院百年史』第2編、学習院、1980年、8、198-199頁。

<sup>20</sup>原田熊雄述『西園寺公と政局』第7巻、岩波書店、1952年、22頁。

<sup>21</sup>原田熊雄述『西園寺公と政局』第8巻、岩波書店、1952年、76-78頁。

<sup>22</sup>前掲『西園寺公と政局』第8巻、84-85頁。

<sup>23</sup>山梨勝之進先生記念出版委員会編『山梨勝之進先生遺芳録』山梨勝之進先生記念出版委員会、1968年、130頁。

方を考察してみたい。まず候補者の年齢は50代から60代前半として、皇太子が成年になるまで継続して担当できる者を選んでいるということが挙げられる。野村の後任である山梨は、海軍兵学校で野村より一年先輩であるが、生年は同じ1877年である。次に、国際感覚のある人物、とくに英米協調派に属する人物を選んでいる点が挙げられる。野村はパリ講和会議、ワシントン会議に相次いで随員として参加しており、原田も野村のことを条約派と考えていた<sup>24</sup>。また山梨は、ロンドン海軍軍縮会議時の海軍次官として条約の成立に貢献したために、後の条約派一掃人事によって予備役に編入されている。さらに、双方とも海軍出身者である。前述したが野村から山梨への交代の際も、陸軍からは全く起用する意志がみられない。その意味では、当時の軍国主義的風潮からは距離のある人物を選ぼうとしていたように見える。当時侍従次長兼皇后宮大夫だった広幡忠隆は、将来大元帥になる皇太子を軍国主義的にしつけるべきだという軍部を中心とする勢力から皇太子を遠ざけたのちに回顧している<sup>25</sup>。ただし、これは軍から全く切り離して教育を行うということではなかった。おそらく、ジョン・ダワーが吉田茂や牧野伸顕について述べた「振り子理論」のような考え方、つまり軍国主義の時代が一時的なものであり、いずれ常態に復帰するという考えが天皇周辺にはあったのではないだろうか<sup>26</sup>。

### ・教育方針

皇太子の初等科入学後の教育方針を示す史料はあまり見つかっていないが、その中では「一般学生と差別しない」ということが強調されている<sup>27</sup>。これは昭和天皇と比較するとより明確になる。昭和天皇が初等科に入学した際は、皇族2名を含め12名が同級生になり、その他はすべて華族の子弟であった。同級生だった永積寅彦によれば、もう一方のクラスには26、7人在籍していたが、クラス替えは一切なかったようである<sup>28</sup>。のちに御学問所の御学友に選ばれ、10年以上机を並べた永積ですら、御学問所時代の地方旅行の際に、昭和天皇と一緒に人力車に乗せられて「甚だ弱りました」と述べていることからしても、同級生は「友人」というよりは同世代の「侍従」に近い存在であったのではないかと思われる<sup>29</sup>。それに対し、皇太子の場合は同学年に67名（華族35名、平民32名）の生徒がおり、そのうち33名が同級生となった。また初等科の6年間のうち3年間は皇太子と同じクラスになるようにクラス替えが行われたようであるので<sup>30</sup>、皇太子と学生との交流を意識的に行おうとする意図が感じられる。

両者の教育の差は、初等科卒業後の御学問所の設置問題でより明確に現れる。昭和天皇は、初等科卒業後に御学問所で御学友5名と共に教育を受けることになったが、皇太子明仁は中等科に通いながら御学問所でも教育を受けるという併用案であった<sup>31</sup>。つまり、山

<sup>24</sup>前掲『西園寺公と政局』第5巻、182-183頁。

<sup>25</sup>前掲『頭陀袋』87頁。

<sup>26</sup>ジョン・ダワー『吉田茂とその時代』上巻、中公文庫、1991年（初版はTBSブリタニカ、1981年）、162-168頁。

<sup>27</sup>『東京朝日新聞』1940年1月7日朝刊の山梨の発言。同1940年5月7日掲載の松平宮相の地方長官会議での謹話など。

<sup>28</sup>永積寅彦『昭和天皇と私』学習研究社、1992年、34-36頁。

<sup>29</sup>前掲『昭和天皇と私』90頁。

<sup>30</sup>同級生の真田尚裕が、三年ずつ行くはずが、戦争によって狂ったと話しており、疎開の際にはその法則にとらわれなかったようである。「殿下とぼくたち—学友座談会記録—」前掲『立太子記念御写真帖 皇太子殿下』184頁。

<sup>31</sup>前掲『学習院百年史』第2編、138-139頁。1941年7月28日に宮内省は、喜多見御料地に御学問所と中

梨だけでなく、天皇自身を含めた側近達も、昭和天皇への教育には欠陥があったと認識していたということになる<sup>32</sup>。両者の大きな違いは、中等科に通うこと、つまり多数の学生の中で教育を行う点である。山梨はのちに、時代に対する調節が必要なために昭和天皇とは異なる方法を取ったと説明をしている<sup>33</sup>。だが、昭和天皇と同じように教育すべきであるという意見も根強く存在していた<sup>34</sup>。しかし敢えてそこで中等科に通わせることになった理由は、第一次世界大戦後の世界的な君主制の危機の中で、近代的君主には必要不可欠である会話などの社交能力の修得と、学生仲間との交流による精神的成長の達成にあったと考えられる。

昭和天皇への教育は、御学問所で行われていた当時から批判を受けていた。この点については波多野勝が詳しく検討している<sup>35</sup>。波多野によれば、成年式のあった1919年頃から、元老山県有朋などによって、話しかけても全く無反応であった皇太子裕仁への危惧が表明されていた。山県はその原因を「浜尾〔引用者注：浜尾新東宮大夫〕の箱入り御教育の如き方針に基因する」と見ており<sup>36</sup>、原敬首相の言葉を借りれば「今少しく政事及び人に接せられる事等に御慣遊ばさるゝ」ことが求められた<sup>37</sup>。そこで、皇太子教育を開放的にする、つまり政務の聞き取りや大演習への参加など、実体験を通して見聞を広めることが奨励された。1921年の欧州への外遊はこの一環として行われ、皇太子裕仁は外交団への対応などをこなすことができるようになった<sup>38</sup>。しかし敗戦直後の全国巡幸の際には、奉迎者との対話がなかなか成立せず、「あっそう」が流行語になるなど、対話に苦労した形跡があり、完全に克服したとは言い難かった。皇太子の教育は、このような昭和天皇の教育の問題点を認識した上で考えられたと思われる<sup>39</sup>。また学習院に通う他の皇族の扱いは「一般学生と平等な指導」を原則としており、特別な地位を離れて学校生活を送ることの教育的効果がすでに認められていた<sup>40</sup>。学習院という一つの社会の中で、皇太子を一人の生徒として教育を行おうとしたのである<sup>41</sup>。

---

等科を併設することを決定し、学習院に通知した。

<sup>32</sup>戦後に学習院が占領軍の民間情報教育局（CIE）に提出した「学習院の現状及び将来」の中の「東宮御教育」のなかに、「本制度〔引用者注：御学問所での個別教育〕は素より其長所なきに非らざるも欠陥も相当に認められ」とあり、学習院側は「欠陥」があると認識していたことは間違いない。学習院大学五十年史編纂委員会編『学習院大学五十年史』上巻、学習院大学、2000年、74-75頁。

<sup>33</sup>前掲『山梨勝之進先生遺芳録』131頁。

<sup>34</sup>山梨は、ある人から「今の陛下のどこに影響があるんだ」というような調子で、「今の陛下のような立派な人格というものは、一体どこで、誰が、どういう風に教育したんだ、目の前に立派な鑑があるんじゃないか。何が故に、今さら中等科に行かなければいけないのか」と反対を受けたと語っている。「中等科座談会 小金井時代—山梨前院長を囲んで—」（以下「中等科座談会」と記載）1955年9月24日、32、58頁（山梨の発言）、学習院院史資料室蔵。

<sup>35</sup>以下の内容は、波多野勝『裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記』草思社、1998年、18-34頁を参照にした。

<sup>36</sup>奈良武次『侍従武官長奈良武次日記・回顧録』第4巻、柏書房、2000年、116頁。

<sup>37</sup>原奎一郎編『原敬日記』第5巻、福村出版、1965年、166頁、1919年11月6日。

<sup>38</sup>波多野は帰国直後の皇太子が英仏大使に対して、当意即妙な返答をしたことを例として挙げている。前掲『裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記』154頁。

<sup>39</sup>宮内庁嘱託の医師であった昭和天皇の「御学友」の佐藤（旧姓黒田）忠雄が、皇太子教育への提言の中で御学友を限定することに反対していたことも、このことを裏付ける。高松宮宣仁親王『高松宮日記』第6巻、中央公論社、1997年、65頁。

<sup>40</sup>前掲『学習院百年史』第2編、74頁。

<sup>41</sup>ただし、当然ではあるが全てが「平等」な扱いであったわけではない。一年の二学期より傅育官が教室に必ず立ち会い、食事は別室で取るなど特別扱いはなされていた。同級生の橋本明は、日光に疎開して御用邸が教室になった時から交流が飛躍的に密になったと述べている。つまり山梨達の考え方と実態とは多少のずれがあったようである。前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』66頁、前掲『平成の天皇』124、257-258頁。

ただし、このような教育を行う場合に問題となるのが、前節で述べた学習院の風紀問題であった。学習院の校舎は初等科が四谷にあったが、中等科と高等科は共に目白にあった。そのため、輔仁会の部活動において、教師の指導に従わない高等科学生の悪影響を中等科の学生が受けるという状況が生まれていた<sup>42</sup>。そこで、宮内省と学習院は、中等科と高等科の校舎の分離を目指すことになった。1940年に山梨院長は喜多見御料地への中等科の移転を上申し、承認された。しかし、日米戦の勃発により1943年に建設が中止となった<sup>43</sup>。その後は目白に御学問所を建設する予定となったが、山梨はあくまでも中高分離を目指した。実際に分離が成功するのは戦後になってからである。

### ・軍人にならなかった皇太子

皇太子は1943年12月23日に満10才となり、武官に任官することが可能になったが、結局は任官せずに敗戦を迎えた。1910年3月に制定された皇族身位令第17条によれば、「皇太子皇太孫は満十年に達したる後陸軍及海軍の武官に任す」とあり、原則として満10才で陸軍及び海軍少尉に任官することとなっていた。ちなみに昭和天皇は、1912年9月9日、明治天皇の死去により皇太子となったために満11才で任官した<sup>44</sup>。

任官していた場合は所属するはずであった近衛歩兵第一連隊の橋本賢次少佐は、皇太子の任官を予期した鶴飼芳男連隊長が指揮して、1942年11月24日に連隊本部前に皇太子用の式壇を竣工したと記録している。また橋本はこの式壇の建設について「当然、師団及び軍の了解の下に造られたもので、皇太子殿下の御隊附については、時の東条陸軍大臣も軍の戦意高揚の上から是非と・・・宮内省に申し入れたと言われているが、陛下には遂にお許しにならなかったと承っております。」と述べている<sup>45</sup>。このことが行われなかった理由は2点考えられる。

1 点目は、前述の様に軍国主義から皇太子を遠ざけようとしていた傾向が見られるということである。将来はいずれ大元帥として軍を指揮する立場に立つことになるが、その教育を急いではいなかったように見える。軍人出身の傅育官は1944年7月に任官した黒木(当時は西郷) 従達海軍主計大尉のみであるが、パラオ沖で乗船が撃沈されるなどの実戦を経験していたとはいえ、東京帝国大学卒で三菱重工に入社し、その後に海軍短期現役主計士官となった人物であり、海軍兵学校卒の軍人ではなかった<sup>46</sup>。1945年4月になってから、将来のお付き武官就任の含みで、高杉善治陸軍中佐が学習院御用掛として疎開中の日光へ赴任した。しかし高杉が山梨学習院長から聞いた話によると、天皇は自分が幼年時に任官した経験から、あまり幼少の頃から任官することは望ましくないと考えていたようである<sup>47</sup>。

<sup>42</sup>前掲『学習院百年史』第2編、134-135頁。なお「悪影響」は共産主義のことではないと思われる。1932-3年にかけて、学習院在学及び出身の共産主義賛同者が逮捕されたが、その中には、岩倉公爵の妹、昭和天皇の皇太子時代の侍従の息子も含まれていた。そのため、宮内省・学習院は華族への思想善導方策を積極的にに行い、共産主義運動のほとんどを停止させることに成功していたという。同上、178-187頁。荻野富士夫『昭和天皇と治安体制』新日本出版社、1993年、108-126頁。

<sup>43</sup>前掲『学習院百年史』第2編、134-142頁。

<sup>44</sup>大正天皇は1889年11月3日の立太子礼の時に陸軍少尉に任官した。当時は満10才である。

<sup>45</sup>橋本賢次「連隊歴史夜話(二)」『全国近歩一会報』44号、1991年2月1日。式壇については連隊歴史に「式壇ハ聖壇ニシテ一段高キ大理石上ニハ臣下ニシテ登リ得ルハ連隊旗手ノミナリ」との記載がある。近歩一聯隊史刊行委員会編『近衛歩兵第一聯隊歴史』上巻、全国近歩一会、1986年、577頁。

<sup>46</sup>前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』102頁。

<sup>47</sup>前掲『昭和史の天皇』第5巻、58-59頁、前掲『高松宮日記』第6巻、66頁にも同様の記述がある。

2点目は、任官は皇太子教育に不利になるという考えがあったことである。石川岩吉首席東宮傳育官等は、皇太子が任官すると軍関係の行事にたびたび出席しなければならず、初等教育が完全に履修できないとして反対の意向を示していた。東園傳育官は石川から「ご教育上、望ましいことではないのでご任官願わないことにする」と1943年に聞いたという<sup>48</sup>。また軍務に就けば、近衛歩兵第一連隊と第一艦隊付になるため、空襲の危険性が高まりつつある東京に滞在せざるをえなくなることを側近達が考慮したとも考えられる<sup>49</sup>。

以上から満10才での任官はなされなかった。ただし、このために大元帥としての教育が全くなされていなかったと考えてはならない。1942年4月からは乗馬の訓練が行われ、後述(159頁、表6-4)するように軍事施設への行啓も多数行われていた<sup>50</sup>。また高杉は日光に着任した際に、1946年4月の中等科進学の際の御学問所創設と同時に皇太子を任官させることになっていると山梨から伝えられていた<sup>51</sup>。だが、1945年8月に戦争は終結し、皇太子は任官することがなかったのである。もし一度でも軍服に袖を通していただければ、戦後に皇太子が冠した平和主義者イメージに影ができたであろう。

### ・東宮職の設置

石川岩吉首席傳育官は天皇側近からの評価が低かった。侍従の入江相政は石川のことを「全く自己あつて東宮様のことは全く閑却してゐるとしか考へられない」<sup>52</sup>と批判している。特に、学習院の中等科移転中止への反対の際に石川が頼りにならず、入江は「今日の大臣〔引用者注：木戸幸一内大臣〕との面会、石川の自己弁護とけつの穴の小さくとが禍して砧御移転の必然性を力説すべき絶好の機会を逃してしまった。こんないまいましいことはない」<sup>53</sup>と書き残している。1942年11月21日に木戸は「松平宮相、百武侍従長、白根次官、穂積男、広幡太夫、甘露寺次長、小倉侍従等参集、東宮の御将来の方針に関し協議」<sup>54</sup>しており、すでに石川がはずされ、穂積重遠男爵が新しく設置される東宮職の長官である東宮大夫の候補として挙がっていることが示唆されている。

穂積重遠は当時東京帝国大学教授として家族法を研究しており、川島武宜、戒能通孝、平野義太郎などの数多くの法学者を育てたことで知られる<sup>55</sup>。宮内省とは全く縁がない穂積がここで候補に挙がっている理由は、穂積が木戸の義兄(妻同士が姉妹)であったことが大きかったものと思われる。

木戸は1945年2月20日に大金益次郎宮内省総務局長と東宮職設置について話し<sup>56</sup>、3月3日には宮相室で東宮職設置の会議<sup>57</sup>を行っている。敗色濃厚の時期に東宮職の設置を

<sup>48</sup>前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』94頁。

<sup>49</sup>皇太子の疎開は、沼津御用邸へ1944年5月15日に向かった所から始まり、その後日光田母沢御用邸、さらに奥日光南間ホテルへと移動して敗戦迎えた。

<sup>50</sup>前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』74-84頁。

<sup>51</sup>前掲『昭和史の天皇』第5巻、58-59頁。

<sup>52</sup>入江為年監修、朝日新聞社編『入江相政日記』第2巻、朝日文庫(初版は朝日新聞社、1990年)、93頁、1941年6月4日。1940年ごろから、石川の更迭、もしくは東宮職の設置により石川の権限を奪うことを主張し続けている。同書50、57頁、1940年11月7日、12月4日。

<sup>53</sup>前掲『入江相政日記』第2巻、234頁、1943年4月8日。

<sup>54</sup>木戸幸一『木戸幸一日記』下巻、東京大学出版会、1966年、996頁、1942年11月21日。

<sup>55</sup>利谷信義「日本における家族法学の生誕—家族法学の父・穂積重遠—」『家族と国家』筑摩書房、1987年、160頁。また、穂積の父は明治民法起草者である法学者の穂積陳重、叔父は法学者の穂積八束である。

<sup>56</sup>前掲『木戸幸一日記』下巻、1172頁、1945年2月20日。

<sup>57</sup>前掲『木戸幸一日記』下巻、1174頁、1945年3月3日。

準備しているのは、実際に敗戦になったときに日光に疎開していた皇太子の元に東宮職を設置して、東京の皇后宮職から独立させ、万が一宮内省と連絡が取れなくなっても独自行動ができるようにするためであった<sup>58</sup>。穂積の東宮大夫起用も、身内の信用できる人物を選ぶという選択肢しかなかったという理由であると思われる<sup>59</sup>。

そしてポツダム宣言受諾が決まった直後の8月10日に東宮職が設置され、東宮大夫に就任した穂積は、新任の東宮侍従となった柴木忠常や角倉志朗らを率いて皇太子の疎開先である日光へ向かった、そして8月15日には、玉音放送の解説を皇太子に行ったのである<sup>60</sup>。

敗戦後しばらくは、東京の戦災状況や米軍の傍若無人な振る舞いを皇太子に見せたくないなどの理由で皇太子は日光にとどまった。そして、石渡荘太郎宮内大臣からの天皇の心労を安らげるために帰京して欲しいとの要請に応じたのは11月7日のことであった<sup>61</sup>。

また、天皇と皇太子との面会についても、できる限り子供と会いたい天皇と、皇太子が女官に過保護にされることを防ぐためにできる限り会わせたくない東宮職との間に議論が起こった<sup>62</sup>。結局、敗戦後の新たな局面における皇太子教育の方針については、学習院の存続問題との関わりの中で論じられていくようになり、学習院長の山梨を中心として進められていくことになった。

## (2) 戦後民主主義下の皇太子教育

### ・御学問所教員の選定

東宮傅育官であった村井長正の回想によると、御学問所を設置するため、1942年頃から野村行一学習院高等科長、山田康彦東宮傅育官、入江相政侍従、そして村井によって教員の選定が行われた。しかし、木戸幸一内大臣に「今はその時期ではない。軍事情勢が許さないのだ」と言われて一度は立ち消えになったという<sup>63</sup>。その後、1944年9月12日に野村が皇后宮職御用掛兼東宮御学問所開設準備主任に就任し、教師の選考にあたることになった<sup>64</sup>。なお「主任」の役割は、各教師が作成する教科書の監修、カリキュラムや時間割の編成などの事務的事項を管掌するものであった<sup>65</sup>。野村は御学問所の内容について、牧野伸顕元内大臣を訪問して意見を聞き<sup>66</sup>、木戸幸一内大臣の意向も尋ねた<sup>67</sup>。

<sup>58</sup>高橋紘「解説」木下道雄『側近日誌』文藝春秋、1990年、285頁。

<sup>59</sup>宮内省は、敗戦を容認しない部隊による皇太子擁立や連合軍による皇太子拉致を警戒していた。実際に皇太子の警衛を担当していた近衛兵はいざというときのために日光からの脱出の準備を行っていた。前掲『昭和史の天皇』第5巻、71-126頁。

<sup>60</sup>前掲『昭和史の天皇』第5巻、105-6頁。なお、石川は東宮職御用掛となり、1946年に國學院大學の学長に就任して東宮職を離れた。

<sup>61</sup>前掲『昭和史の天皇』第5巻、125-126頁。

<sup>62</sup>前掲『側近日誌』40-41、47頁、1945年11月11日、13日。

<sup>63</sup>前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』96頁。

<sup>64</sup>なお野村の起用を主張したのは、高等科時代の教え子であった入江と山田である。野村行一は1923年より学習院高等科でドイツ語を教えており、当時は高等科長の座にあった。入江は野村の堂々としていて清純なところを高く評価しており「どこかの高等学校の生徒監のような人をつれてこようという動きがあったり、修身の先生をひっぱってこようという議があったりした。そんなものにこられたら皇太子さまのお人柄の幅がせまくなってしまいうので、われわれはやっきとなって反対した。そしてどうしても先生をつれてこなければいけないと思った。」として、山田と再三にわたって口説き落としたりしたという。入江相政「野村東宮大夫の思い出」『文藝春秋』35巻10号、1957年10月、148-153頁。

<sup>65</sup>大竹秀一『天皇の学校』文藝春秋、1986年、253頁。なお昭和天皇の際は、歴史を担当していた白鳥庫吉学習院教授が就任していた。

<sup>66</sup>前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』96頁。

<sup>67</sup>1944年9月17日、12月15日に木戸と東宮教育について話し合っている。また1945年4月24日には



そして、1945年4月23日に9名の教員が選定され、皇后宮職御用掛に任命された。担当は、漢文：諸橋轍次（東京文理科大）、数学：杉村欣次郎（東京文理科大）、修身：武内義雄（東北帝大）、国語：久松潜一（東京帝大）、物理：小谷正雄（東京帝大）、東洋史：山本達郎（東京帝大）、日本史：児玉幸多（学習院）、水泳：猿木恭経（学習院）、英語：菊池浩（学習院）であった<sup>68</sup>。なお御学問所総裁の選考はこの時に行われなかった様である。おそらく、昭和天皇の時の前例（総裁は東郷平八郎海軍元帥）から、軍人の起用が想定されていたが、敗戦が現実視されたために人事を延期したと思われる。その後、日本は敗戦し、後述するように御学問所は開設されなかったため、この人事自体が消滅した。だが、選ばれた9名の教官は、敗戦後も学習院で皇太子のクラスを受け持つか、個人指導の形で皇太子の教育に携わった<sup>69</sup>。おそらくは敗戦を見越した上で、初めからその後も指導にあたる人物を選んだものと思われる。

この人選で一番注目すべきは、修身すなわち倫理を教えることになった武内義雄である。昭和天皇への教育の際に倫理を教えたのは杉浦重剛であり、天皇に多大な影響を与えたとされている。そのことから考えて、武内は杉浦と同様の役割を期待されていたと考えられる。武内は、京都帝国大学で中国思想史を狩野直喜、内藤湖南から学び、論語や老荘思想などといった中国古典の専門家として活躍していた。武内の回想によると、皇太子教育を行う際に、「杉浦先生の『倫理講演集』〔引用者注：『倫理御進講草案』の事だと思われる〕をよみ範を取って、教育勅語を題材に取った講釈を試みた」とあり、杉浦と同様の教育方針を取ったようである<sup>70</sup>。実際に武内が皇太子を教えたのは戦後になるが、教育勅語を使うことに特に問題を感じていなかったようである。

### ・穂積重遠の新憲法解釈

東宮大夫に就任した穂積重遠が、実際にどのような教育を行っていたかについては史料自体が非常に少なく詳細はあまりよくわからない。穂積は毎週日曜日に40分ほどその時々「よもやま話」を皇太子に対して行っていた<sup>71</sup>。読売新聞記者の小野昇は「法律とか、経済とか、国際連合、ストライキ、憲法などという問題については穂積先生から、そのつどお聞きになるそうです」と書いている<sup>72</sup>。そこから推測すると、新憲法の施行の際には、おそらく皇太子に対して憲法の何が変わったのかという点についての説明を行っていたと判断できよう。そこで、穂積が東宮大夫就任中に書いた新憲法の大衆向けの解説書である

東宮教育についての経緯を木戸に報告している。前掲『木戸幸一日記』下巻、1141、1158、1197頁。

<sup>68</sup>前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』152頁。

<sup>69</sup>個人指導を行ったのは武内と児玉である。これは中等科入学当時、修身と日本史の授業が禁止されていたためである。日本史は解禁後に学習院で教えられたようだが修身は不明。前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』160-161頁。

<sup>70</sup>武内義雄「学究生活の思い出」『武内義雄全集』第10巻、角川書店、1979年、432頁。武内はこの際の御進講の文章を保存しているとのことである（未公開）。息子の武内義範によれば、「日本の儒教の話などですね。清原〔引用者注：平安時代に明経博士を多数輩出し、経書を教えていた家系〕の学問の話とか、日本の明経博士、文章博士の業績とか、中国文化や精神をどういふふうに取り入れたかなど、割合にポピュラーなもの」であったと述べており、実際に杉浦からどのような影響を受けているのかは、文章自体が公開されなければわからない。吉川幸次郎・貝塚茂樹・小川環樹・金谷治・武内義範「〔座談〕武内義雄博士の思い出（五）」『武内義雄全集 月報5（第8巻付録）』角川書店、1978年、7頁。

<sup>71</sup>『朝日新聞』1945年12月23日。

<sup>72</sup>小野昇『皇太子さま』白雲堂、1947年、62頁。毎日新聞記者の藤樫準二の著書には、皇太子が「民主主義とは何ですか」と問い、穂積が「国民のすべての希望によって、その幸福をはかる政治をすることです」と答えているシーンがある。藤樫準二『天皇とともに五十年』毎日新聞社、1976年、108頁。

『私たちの憲法』を取り上げ、穂積の象徴天皇制の描き方について述べておきたい。

まず憲法自体の評価についてである。大日本帝国憲法も立派な憲法であったが、「わたしたち一同が憲法の条文をよく読まなかった」ために運用を失敗した<sup>73</sup>。そして新憲法は、以前の勅定憲法とは異なり、「わたしたちの結んだ契約でありわたしたちの立てた誓い」であるため、「知らなくてはすまない、守らなくては済まない、と覚悟反省」し、「新憲法はわれらの契約」としてきちんと読む必要がある<sup>74</sup>。

次に天皇制についてである。まず「象徴」という意味については「精神的代表」であると説明する。それは「法律的代表」「政治的代表」ではないということである。だから天皇が行う国事は全て「儀礼的な事から」になる。その「儀礼的な事から」を天皇が行う理由は、国家の行動に権威を付与するためである<sup>75</sup>。

次に、「日本国の象徴」だけでなく「日本国民統合の象徴」として言葉を重ねていることについては、「たての日本の象徴」と「よこの日本の象徴」という二つの説明をしている。「たての日本の象徴」とは、「二千六百年万世一系と信じられ来った天皇」が、同一の国家として過去、現在、そして未来に存在することを証明する象徴的存在であるということである。「よこの日本の象徴」とは、八千万の国民を同一国民として統合するための中心としての天皇の存在のことである。つまり、国家の存在意味と国民の統合には天皇が絶対に欠かせないという考え方である<sup>76</sup>。

また、「国体が変わったのか」ということについて議論を展開している。国体を主権の問題として捉えれば変化しているが、「国がら」という意味にとると変わっていない。それだけでなく、新憲法第一条は「偶然にも日本古来の正しい考え方を言い当てた」ものであり、「国民総意の上に天皇が万世一系たりしこと」が日本の国体であったのだとした。言い換えると、古来より日本は「一君万民」であり、「万民を通しての一君」であったが、明治憲法下では「一君から見た万民」とされた。それが、新憲法によって「万民を通しての一君」に戻ったのである<sup>77</sup>。

まとめると、穂積は明治憲法と新憲法における天皇の地位については、主権の上では断絶していても、国民と天皇の精神的な関係は連続しているものとして考えていた。また、象徴天皇制こそ古来からの天皇制を表したものであると考えており、明治憲法の天皇の大権の行使も国務大臣の輔弼により、その責任において行われることになっていたために「新憲法第三条と大差なかった」とし運用の誤りこそが問題であったとした<sup>78</sup>。

皇太子明仁は天皇について、「日本の天皇は文化といったものを非常に大事にして、権力がある独裁者というような人は天皇の中では非常に少ないわけですね。そういった特色が長い間あるわけです、この象徴というものは決して戦後にできたものではなくて、非常に古い時代から象徴的存在だったとっていいと思うんです」<sup>79</sup>と発言をし、明治天皇に関しても「あの憲法をどのように解釈するかによってくると思います。〔中略〕一方で明治天皇が政治的な発言をしたことはあまりないんじゃないかと思います〔中略〕そういう

<sup>73</sup>穂積重遠『私たちの憲法』社会教育協会、1948年、2頁。

<sup>74</sup>前掲『私たちの憲法』10-11頁。

<sup>75</sup>前掲『私たちの憲法』11-15頁。

<sup>76</sup>前掲『私たちの憲法』15-16頁。

<sup>77</sup>前掲『私たちの憲法』16-19頁。

<sup>78</sup>前掲『私たちの憲法』17-18頁。

<sup>79</sup>1978年8月10日記者会見。菌部英一編『新天皇家の自画像』文春文庫、1989年、161頁。

意味で明治天皇のあり方も、政治とは離れた面が強かったとはいえると思いますけれど・・・」<sup>80</sup>と発言をしている。もちろんこの考え方が穂積の影響のためかは不明であるが、新憲法施行当時から、その後の明仁の発言と重なる解釈を教えられていたということは確かであろう。

### ・御学問所構想の中止

敗戦後になってからも、戦前の御学問所を設置する方針は継続していたが、周囲の情勢には大きな変化が起きていた。学習院は敗戦直後から民営化に向けて動き出した。宮内省管轄の学校であったこともあり、特権階級の学校と見られる可能性が高かったためである。そこで、山梨院長と山梨が学習院に招いたレジナルド・ブライスが、联合国最高司令官総司令部（GHQ）の民間情報教育局（CIE）と交渉を行い、1947年4月に民営化されることになった<sup>81</sup>。なお彼らが仲介役となって、1946年正月の天皇のいわゆる「人間宣言」が作成されたことはよく知られている。学習院長である山梨にとって、皇室の安泰、昭和天皇の留位は、皇太子の即位の可能性がなくなることを意味しており、教育方針に直結する重要な問題であった。

その後、山梨はブライスを通して御学問所設置に対する感想をマッカーサーに聞きに行かせた。マッカーサーは御学問所設置について、単独で授業をすると、「超国家主義か何か、日本一流の思想を皇太子様の若い頭に注射する」<sup>82</sup>として反対した。そこで山梨は、中等科に五日通い、一日を個人授業に使うという案を宮内省側に提示した。しかしこれには反対もあったらしい。当時侍従次長であった木下道雄の日記によると、1946年2月7日に大金益次郎宮内次官、加藤進総務局長、穂積重遠東宮大夫並びに東宮侍従達による会議が行われ、「御学問所を設けることにつき、東宮職原案に対し、加藤、木下、大金、賛成せず。結局大臣の決裁を仰ぐこととす」<sup>83</sup>とあり、意見の対立があったことがうかがえる。なお、天皇は特に何も言わなかったようだ<sup>84</sup>。結局、山梨はマッカーサーが反対しているのだから、御学問所設置は不可能であるとして、自らの意見を通すことに成功した<sup>85</sup>。

山梨が御学問所構想をあっさりと捨てたことには理由がある。それは戦前から計画していた中等科と高等科の分離を行い、中等科を郊外に移転することで、混乱した世情から隔離した状態で教育を行うことができる見通しがあったからである。山梨は戦時中にこの計画が中止された後も、分離のための準備を続けていた。そこで重視した点は、皇太子の一年上の学年だけは、上級生として皇太子の学年と同行させようとしたことであった<sup>86</sup>。なぜならば、山梨は皇太子の学年に上級生が全くいないことは教育上好ましくないと考えていたためである<sup>87</sup>。皇太子の一年上の学年は、1945年3月まで修善寺に疎開していたが、上空が敵の飛行機の飛行路にあたることから、「皇太子殿下の次年度中等科御進学に備えて」皇太子と同じ日光に疎開させた<sup>88</sup>。また敗戦後の10月には、この学年（当時の中等科

<sup>80</sup>1987年12月16日記者会見。前掲『新天皇家の自画像』602頁。

<sup>81</sup>前掲『学習院大学五十年史』上巻、38-153頁。

<sup>82</sup>学習院編『学習院百年史』第3編、学習院、1987年、43頁。

<sup>83</sup>前掲『側近日誌』141頁。

<sup>84</sup>前掲「中等科座談会」58頁（山梨の発言）。

<sup>85</sup>前掲「中等科座談会」32-33頁（山梨の発言）。

<sup>86</sup>前掲「中等科座談会」21-22頁（山梨の発言）。

<sup>87</sup>前掲『学習院百年史』第2編、547-548頁。

<sup>88</sup>前掲『学習院百年史』第2編、367、424-425頁。当時の中等科生は目白に残留して勤労働員に従事して

一年生)だけを沼津の学習院遊泳場に移動させて特別教育を行ったのである<sup>89</sup>。

そして、この理想の実現のために新たな校舎が必要となった。当時は資材不足から校舎の新築は不可能であったため、既存の遊休施設を探した結果、北多摩郡小金井町にあった文部省教学錬成所の建物(現在の都立小金井公園)に移転することが決定した。山梨は小金井に決めた理由として、都心の治安の悪化(共産党員の動きなど)、学年ごとの移転のため都心から離れすぎていること(学生が通える範囲内)を挙げている。特に重要であったのは、占領軍が目に入る場所で教育を行いたくないという点であった<sup>90</sup>。理由は明示されていないが、屈辱的な日本人の姿を見せたくないということと、占領軍が皇太子に無礼を働くことへの警戒心もあったのではないと思われる。このように、小金井は外部からは隔離された場所として選定されたのである。

1946年5月、学習院中等科は小金井へ移転し、皇太子も校舎の横にある仮寓所に引っ越した。また、学習院は敗戦直後からの方針で、入学者を一般市民から広く募集すること、華族も一般学生同様に試験によって入学の可否を決めるなどの改革を行った<sup>91</sup>。そのため、皇太子と同学年に、戦後に入学した新たな同級生が生まれることになった<sup>92</sup>。さらに9月には学生寮(光雲寮)が小金井に作られ、皇太子は寮の行事にも積極的に参加するようになり、周囲には常時友人がいる環境が作られていった<sup>93</sup>。

前述したように、学習院は戦前から皇太子を「一般学生の一人」として扱おうとしていたが、それが貫徹せず各所に特別扱いが残っていた。しかし、敗戦後の1946年1月から、朝礼時における皇族学生の並び方を、全学生の前でなく一般学生と同様に列中にするようになったように、次第に特別扱いも減少していった<sup>94</sup>。皇太子は中等科入学によって、やっと「一般学生の一人」に限りなく近い立場として、新たな教育を受けていくことになるのである。

### ・アメリカからの家庭教師派遣問題

山梨によれば、御学問所の設置問題以外に、特別に皇太子教育に関してGHQからの干渉を受けなかったようである<sup>95</sup>。しかし、米国から皇太子の英語を教える家庭教師が派遣されることになった。なおこの派遣計画は、以下に述べるように一方的に米国側から押しつけられたものではなく、天皇やその側近達もかなり積極的であったということである。

マッカーサーの軍事秘書フェローズは、1946年1月頃に吉田茂外相と二人きりで長時間にわたり会談を行った。フェローズの回想によれば、吉田に対し、皇太子は西洋の思想と習慣を学び始めるべきだとして、円熟したアメリカ人女性を皇太子の家庭教師につけるこ

いたので、新中等科一年生が特別扱いされていたことがわかる。

<sup>89</sup>なお中等科二年生以上は目白校舎で授業を再開した。

<sup>90</sup>前掲『学習院百年史』第2編、555-556頁。

<sup>91</sup>前掲『学習院百年史』第3編、25頁。

<sup>92</sup>皇太子と幼稚園時代からの友人であった鳥尾敬孝は、戦後に入学してきた同級生の雰囲気の違いに非常にとまどったと後に回想している。鳥尾敬孝『明仁陛下の青春と共に—皇太子に対するメッセージ—』泰流社、1989年、71-72、153-156頁。

<sup>93</sup>前掲『学習院百年史』第3編、166-169頁。

<sup>94</sup>前掲『学習院百年史』第2編、533頁。宮内記者の小野昇は、小金井の中等科を訪れたとき、皇太子が自分から教師に対して御辞儀をしていた場面を目撃し、戦前にはない変化として驚いている。小野昇「若き憧れの象徴皇太子さま」『スクープ』創刊号、1947年11月、4頁。

<sup>95</sup>前掲『学習院百年史』第3編、43頁。エリザベス・グレイ・ヴァイニング『皇太子の窓』文藝春秋、1989年(初版1953年)、49頁にも、同様の記載がある。

とを提案したとのことである。またその人選は、教育使節団として来日するストッダードに依頼することを勧めたという<sup>96</sup>。のちに彼は、吉田への書簡の中で「私たちが話し合った皇太子のためのアメリカ人女性教師の件は、幸い実現することができました」<sup>97</sup>と書いており、フェラーズが吉田経由で天皇に家庭教師のアイデアを告げた可能性が高い<sup>98</sup>。そしてフェラーズと交流が密であった寺崎英成が実質的な事務担当者となった<sup>99</sup>。

それに対して天皇側は特に抵抗もなく受け入れている。寺崎は、3月15日に木下と共に天皇に拝謁し、「米国婦人家庭教師の事」について話している<sup>100</sup>。また3月19日の寺崎の日記には「学習院教師問題 大臣 次官賛成 学習院長〔山梨勝之進〕にハ報告のみ 反対なかるべし」<sup>101</sup>と記載されており、松平慶民宮内大臣と大金益次郎宮内次官がそのことに賛成していることから、宮内省内では特に反対はなかったようだ。そして3月27日の教育使節団員の謁見の際に、天皇が直接に団長のストッダードに皇太子の家庭教師選定の依頼を行った。3月30日に、寺崎と山梨はストッダードと選考条件についての会合を持った。そこで宮内省側が提示した条件は五点あったが、その中に「日本文化の専門家でないもの一むしろ反対が望ましい」という条件が入っていたことが、後述するように重要であった<sup>102</sup>。

家庭教師にエリザベス・グレイ・ヴァイニングが選ばれるまでの経緯については、土持や高橋が日米双方のクエーカー人脈によって選考がなされたことを指摘している<sup>103</sup>。スト

<sup>96</sup>以上は、東野真『昭和天皇二つの「独白録」』日本放送出版協会、1998年、108、153頁による。なお東野はこの記述をフェラーズ文書にある“Japanese Background”と題された自伝から構成している。フェラーズ文書については同書12-15頁参照。

<sup>97</sup>前掲『昭和天皇二つの「独白録」』153頁。フェラーズ文書、吉田茂宛書簡、1953年4月22日付。

<sup>98</sup>既存の研究（高橋紘など）では、米国人家庭教師の派遣案の発案者はブライスであったと述べられている。その根拠は、ブライスの親友であった新木正之介が本人から聞いたという回想であるが、その文章にはいくつか不審点が見られる。まずブライスが、山梨に一言も相談せず、民間情報教育局（CIE）のヘンダーソンにのみ相談したとの記述があるが、皇太子教育の責任者であると同時にブライス自らが日本で一番尊敬できる人として挙げている山梨に相談しないとは考えにくい。『山梨勝之進先生遺芳録』には山梨が米国人よりも英国人の教師がよいと主張していたことが書かれているため、山梨が米国人を推薦する可能性は無いと判断して、新木が辻褄を合わせて「相談しなかった」と書いた可能性がある。また新木は、ブライスの進言に基づいて石渡荘太郎宮相が米国人家庭教師招聘を天皇に進言したとも述べているが、これは山梨の遺芳録に書かれている石渡が天皇に米国から女性の英語教師を雇うべきだと進言した内容から、独自にブライスの行動を推測している可能性が高い。このように、新木はブライスから聞いたことと他の文書を照らし合わせた上で、自分の解釈を交えて書いている可能性が高いように思える。よって新木の証言は他の史料による裏付けが発見されない限り、信頼性に欠けると言わざるを得ない。

なお山梨によればブライスは米国人が嫌いであったという。またヴァイニングは山梨から聞いた話として、最終選考の際にブライスは「こういう仕事を求めるアメリカの女性は、センセーションをもとめ有名になりたがる」と意見したという。このことからブライスが自発的に米国人を推薦することは考えにくい。前掲『山梨勝之進先生遺芳録』311-312頁。前掲「中等科座談会」34頁、エリザベス・グレイ・ヴァイニング『天皇とわたし』山本書店、1989年、27頁、前田多門「人間宣言のうちそと」『文藝春秋』40巻3号、1962年3月、90頁、新木正之介「ブライスのこと」『回想のブライス』回想のブライス刊行会事務所、1984年、163-164頁、前掲「人選経緯の一考察」46頁、前掲『昭和天皇 一九四五—一九四八』241-243頁。

<sup>99</sup>寺崎は2月20日に宮内省御用掛に就任した後、フェラーズと頻りに接触を重ねた。また寺崎の妻グエンとフェラーズが親戚であったことがわかり、親密さが増したという背景もある。前掲『昭和天皇二つの「独白録」』109-110頁。

<sup>100</sup>前掲『側近日誌』169頁。

<sup>101</sup>寺崎英成／マリコ・テラサキ・ミラー編『昭和天皇独白録 寺崎英成・御用掛日記』（以下「寺崎日記」と略す）文藝春秋、1991年、206頁。

<sup>102</sup>五条件の内容については、ジョージ・ストッダード「天皇と私」『占領教育史研究』明星大学占領教育史センター、3号、1986年、85頁を参照。

<sup>103</sup>以下の選考経緯の記述は、前掲「人選経緯の一考察」38-43頁、前掲『昭和天皇 一九四五—一九四八』

ッダード教育使節団の事務局長格に国務省から選ばれていたゴードン・ボールズは、クエーカーの学校である普連土学園で戦前から理事長を務めていたギルバート・ボールズの次男で、日本生まれのクエーカーである。ストッダードにヴァイニングを推薦したのは、クエーカーの大学であるハヴァフォード大学のルーファス・ジョーンズ教授で、ヴァイニングの友人である。ヴァイニングを推薦したもう一人の人物はクラレンス・ピケット米フレンド奉仕団事務局長であり、ゴードンの叔父にあたる。ゴードン・ボールズは土持に対して、この人選に対して特別な配慮をしていないと主張しているが、おそらく宮内省の条件を聞いた際にクエーカーが向いているということと考えたと思われ、クエーカーの教団が厳選した一名の推薦者を出そうという意図を持っていたことは明白である。クエーカーにとって、日本の皇室に教師を送ることは、世界平和に役立つという考えがあった<sup>104</sup>。

最終的にストッダードは、面接によってヴァイニングを選出し、結果としてはクエーカーが選ばれた<sup>105</sup>。ヴァイニングは 1943 年に米国図書館協会の児童文学賞であるニューベリー賞を受賞した児童文学作家であり<sup>106</sup>、当時はクエーカーのフレンド奉仕団で働いていた。

フェラーズは米国人の家庭教師を提案した理由を明確に述べていない。ただ彼はマッカーサー側近の中で最も天皇制に精通しており、マッカーサーの天皇観に影響を与えた人物である<sup>107</sup>。当時国務次官であったベントンは、ストッダードに対する書簡の中で、未来の天皇に対してアメリカ人の家庭教師が影響を与えるであろうということに非常に興味があるとの指摘をしている<sup>108</sup>。このことから、占領統治には直接の関係はないとしても、将来の日米関係を考えた際に、皇太子を親米派にしておくことはアメリカの利益にかなうとフェラーズが考えたとしてもおかしくはない。

なおこの時期に皇太子の留学案が検討されていたことも注意したい。1945 年末から 46 年初めごろ、CIE のダイク局長が中心となって皇太子の米国留学が検討されていた。木下侍従次長の日記には 1945 年 12 月 30 日に、「皇太子の米国御留学。これは Dyke の考えて居る所だそうだ。」<sup>109</sup>との記載がある。また、ダイクは同月にインタビューにおいて、皇太子の留学を検討することを示唆している<sup>110</sup>。当時 CIE のスタッフ（通訳）の一人であったオーテス・ケーリは、1946 年 1 月 24 日付のシオドア・ドベリー宛の書簡の中で、福島首相秘書官と面会した際に、「皇太子が二年後には高等学校へ進むことになるので、アメ

241-258 頁、を参照した。なおクエーカー人脈とは、日本側では東久邇・幣原内閣の文相であった前田多門、前田の息子の陽一、娘の神谷美恵子や、クエーカーの学校で学んだ経験を持つ恵泉女学園の河井道、津田塾の一色ゆりなどと、GHQ 内のクエーカーであるフェラーズ、教育使節団のゴードン・ボールズなどとの人的つながりを指す。野口雄一郎「戦後皇室民主化のかけのクエーカー人脈」『文藝春秋』66 巻 10 号、1988 年 8 月増刊、がコンパクトにまとめている。

<sup>104</sup>ヴァイニングは就任が決まった際の会見で「この任務を通じて世界の平和と理解とに多少とも貢献できること」に喜びを感じると話した。『朝日新聞』1946 年 8 月 29 日。

<sup>105</sup>前掲「天皇と私」87 頁。

<sup>106</sup>受賞作は *Adam of the Road*, Viking Press, 1942 (『旅の子アダム』トッパン、1948 年)。ニューベリー賞は米国図書館協会が 1922 年に創設した世界最古の児童文学賞。毎年 1 回、米国で出版された作品の中から受賞作品が選ばれる。ヴァイニングは受賞以前に、次点(複数選考)である Honor Books に著書が 3 回選ばれており、児童文学作家としては著名であったと推測される。参照「やまねこ翻訳クラブ」<http://www.yamaneko.org/bookdb/award/us/newbery/index.htm> (2010 年 3 月 23 日確認)。

<sup>107</sup>前掲『昭和天皇二つの「独白録」』31-37 頁。

<sup>108</sup>From Benton to Stoddard, Aug 20, 1946, Department of State, Decimal File 1945-1949, 894.001/8-1046, RG59, National Archives

<sup>109</sup>前掲『側近日誌』94 頁。

<sup>110</sup>Richard Edward Lauterbach, *Danger from the East*, Harper & Brothers, 1947, p.82

リカの予備学校へ下準備に留学させることも考慮中だと聞かされた。」<sup>111</sup>という。つまり、CIE 上層部と政府の間で、中等科在学中に留学させることが検討されていたのである。

この動きは、フェローズが吉田外相と家庭教師についての話をした時期と重なるので、フェローズがこの動きを察知していたかもしくは関わっていた可能性が高い。留学よりも家庭教師を呼ぶことの方が良いと判断された理由は二つ推測できる。まず皇太子をアメリカに留学させれば、「アメリカに拉致された」と考える者が出る可能性があり、占領政策に悪影響を及ぼすおそれがあったということである<sup>112</sup>。さらに、米国の世論がまだ皇太子を好意的に受け入れる環境ではなかったため、かえって皇太子に反米意識を植え付ける可能性や、ひいては日本人の反米感情を高める危険性がありうることも理由として挙げられよう<sup>113</sup>。

これに対し天皇側がなぜ家庭教師を積極的に受け入れたのかを考えてみたい。家庭教師招聘の交渉は寺崎が中心となっており、学習院長の山梨は交渉に立ち会っているもののほとんど意見を述べていない<sup>114</sup>。また、穂積東宮大夫は寺崎の日記に名前が出てこない。このことから、この家庭教師招聘は東宮職や学習院ではなく、天皇とその側近が主導権をとって進めた政策であることがわかる。これまで、天皇は皇太子教育を東宮職や学習院に一任しており、このような人事への介入は非常に異例のことであった。よって、この招聘は日米間の高度に政治的な問題と捉えられていたことは間違いない。天皇にとって、次代の天皇である皇太子に米国人の家庭教師を付けるということは、連合国の天皇制に対する批判的な意見を緩和するという目的があったと思われる。また、それだけでなく、天皇自身が外国文化との接触の重要性を認識していた可能性もある。天皇は皇太子時代に欧州へ旅行したことを生涯一番の思い出として記者会見で述べており、青年時に外国文化を摂取することに対する肯定的評価があったと思われる<sup>115</sup>。

しかしこの招聘案は双方に危険が伴った。一点目は、アメリカが家庭教師を押しつけて皇室を洗脳していると思われる危険性があったことである。そこで、公式的には天皇が直接依頼するという形を取る必要があった。上記で述べた経緯は、寺崎や木下といったごく少数の関係者しか知らなかった。ストッダードやヴァイニングは経緯を知っていた形跡がない。ヴァイニングは、GHQ は自分の招聘に全く関係していないとして、天皇本人の意志によって呼ばれたことを強調している<sup>116</sup>。彼女はその根拠として、来日してから半年後にマッカーサーと初めて会ったときに、天皇がアメリカ人の家庭教師を招いたことを意外だ

<sup>111</sup>オーテス・ケーリ編訳『天皇の孤島』サイマル出版会、1977年、182頁。正確には高等科進学は三年後である。

<sup>112</sup>事実、敗戦直後の流言の一つに次のようなものがあった。「天皇ノ御退位ハ実現スルラシイ。天皇ノ御退位ト同時ニ皇太子殿下カ御踐祚遊ハサレ、皇太子殿下ハ米国御遊学トノ事テアル。態ノ良イ人質ト言フ訳デアル。」内務省保安課政治係（東京都）「天皇陛下御退位説ソノ他ノ言動」1945年10月3日、栗屋憲太郎・川島高峰編『敗戦時全国治安情報』第2巻日本図書センター、1994年、144頁。

<sup>113</sup>この3年後の1949年にシーボルト外交局長は、皇后から皇太子のアメリカ留学案を示唆されたことを国務省に報告している。それに対する回答によれば、戦争の記憶が残っているために皇太子が不快な思いをする可能性が高いこと、さらに皇太子への仕打ちに対して日本人が敏感に反応して反米意識が高まることもありうることを理由にして、反対の意向を表明している。From Sebald to Butterworth, 1949/1/22 & the reply, Department of State, Decimal File 1945-1949, "123 Sebald", RG59, National Archives

<sup>114</sup>ストッダードによれば、条件を話し合った3月30日の二時間に亘る会合で、山梨はほとんど口を開かなかったという。よって、山梨は詳しい事情を知らず、事実上寺崎が窓口となっていたことが伺える。前掲「天皇と私」85頁。

<sup>115</sup>1970年9月16日記者会見。高橋紘『陛下、お尋ね申し上げます』文春文庫、1988年、143-144頁。

<sup>116</sup>前掲『皇太子の窓』21-22頁。

と思っているようだったということも挙げている。またこの時にマッカーサーは、来日してすぐに会わなかったのは「危険が伴ったため」つまりアメリカ側から押しつけられたとの誤解を招かないためであったと述べていた<sup>117</sup>。しかしこのことは、マッカーサーが家庭教師問題についてよく理解していることの裏返しであり、天皇の権威を損なわないための方便であったと考えるべきである。

二点目は、家庭教師の人選によっては、皇太子が反米になる可能性もあったこと、またキリスト教の影響を多大に受ける可能性もあったことである。そのために、家庭教師の契約は一年単位で授業は週一時間とし、日本への先入観のない者を選ぶことにした<sup>118</sup>。つまり、実際に授業を行った上で授業の増減を判断することとし、日本や皇室に対する好意的な思考をこれから身につけることができる者を求めたのである。ヴァイニングは来日後、天皇皇后に暖かく迎えられ<sup>119</sup>、正式な授業が始まってすぐに山梨やブライスによって京都旅行に連れて行かれている<sup>120</sup>。またヴァイニングはアメリカを出発する前に、既にアメリカに帰国していたフェラーズとワシントンで会談をしており、その際にフェラーズの友人である河井道恵泉女学園長の自伝を渡されている。また連合軍翻訳通訳部(ATIS)部長を勤めていたマッシュビルもその場に同席しており、知日派の占領軍関係者から皇室への肯定的な情報を入手していることは間違いない<sup>121</sup>。このように双方がリスクを最小限に抑えた結果として、ヴァイニングは招聘されたのである。

### ・ヴァイニングの教育

ヴァイニングは1946年10月に来日し、週一回の個人授業および週二回の学習院の皇太子のクラスへの授業に従事することになった。寺崎は、ヴァイニングが授業を初めてすぐの10月31日に、松平慶民宮相から「陛下「バイニング」一時間の教授でハ足りぬと仰せらる。」<sup>122</sup>と伝えられ、さらに12月18日の拝謁の際には「バイニング夫人、教授時間増加の件(タイムにより)申し上ぐ、そうしようと仰せらる」<sup>123</sup>との回答を得ており、翌年1月から個人授業が週二回に増加した。また、同時に皇后にも週二回英語を教えることになった<sup>124</sup>。ヴァイニングが皇室からかなりの高評価を得ていたことが、ここからは伺える。

小金井の東宮職の侍従達は家庭教師の選考に関わるができなかったこともあり、初めのうちはヴァイニングを警戒していたようである<sup>125</sup>。また民主主義への不安という点も

<sup>117</sup>前掲『皇太子の窓』119-120頁、前掲『天皇とわたし』136-138頁。

<sup>118</sup>前掲のストッダードのメモには、できる限り短めの契約期間で試す(try-out)ことが関係者全てにとって都合がよいとの記載がある。前掲1-J-14(Geroge D. Stoddard Papers)。

<sup>119</sup>前掲『皇太子の窓』40-45頁。

<sup>120</sup>前掲『皇太子の窓』71頁。

<sup>121</sup>以上の内容は、フェラーズ文書、Letter, From Vining to Fellers, 1946/9/22に記載されている。なお渡された河井の自伝は、おそらく、Michi Kawai, *My lantern*, KyoBunKwan, 1940, Tokyo(後に和訳。『わたしのランタン』恵泉女学園、1968年)のことだと思われる。

<sup>122</sup>前掲「寺崎日記」252頁。

<sup>123</sup>前掲「寺崎日記」272頁。

<sup>124</sup>前掲『皇太子の窓』81頁。なお、ヴァイニングの通訳であった高橋(現姓松村)たねによれば、ヴァイニングは皇后の授業の際に皇太子の日常生活について話しており、また高橋も授業中に、高木多都雄御用掛(皇后の通訳)や松平信子(松平恒雄元宮相夫人で秩父宮勢津子妃の母)に皇后の日常生活について聞いたり、皇太子の近況を伝えたりしたそうである。筆者による松村たね氏へのインタビュー(2001年11月2日)。

<sup>125</sup>前掲『皇太子の窓』57-58頁。なお、東宮職内部のヴァイニングへの対応は個人差があることに注意すべきである。野村行一御用掛、角倉志朗、清水二郎両東宮侍従は、英語が堪能であったこともあり、ヴァイニングとの交流が多く、その立場に理解を示していたが、穂積や黒木従達東宮侍従は余り意見が合わな



理由としてあったようだ。読売新聞の皇室記者であった小野昇によれば、思想的に白紙状態である皇太子に民主主義教育を徹底させると「天皇としてのエレメント」をなくしてしまい、自分の恋愛のために王位を捨てた英国のエドワード八世の様なことがおきかねないという不安が側近の中にあったという<sup>126</sup>。特に東宮大夫であった穂積は、ヴァイニングが皇太子の教育についての提言を行おうとしても話を聞こうとはしなかった<sup>127</sup>。

しかし、ヴァイニング自身は、英語を教えるということは「日本に対して新しい動的な関係をもつようになったアメリカ的な民主主義の思想と実践とを、皇太子殿下その他の生徒たちに教えるという、さらに大きな仕事の方にすぎない」<sup>128</sup>と考えており、積極的に民主主義的な素養を皇太子に教えていった。中学生への英語教育であること、また英語のみを使って教育する「直説法」による教育であったため、ヴァイニングの意図がどこまで皇太子に伝わったかについてはあまり過大評価をすべきではないが、皇太子はリンカーンのゲティスバーグ演説を暗唱することができるようになっていたようである<sup>129</sup>。

また、ヴァイニングは皇太子の教育環境の改善への提言を積極的に行った。具体的には、親子同居や弟の義宮との同居<sup>130</sup>、侍従のみに囲まれている生活を改めることなどである<sup>131</sup>。このようなヴァイニングの方針は、東宮職で必ずしも受け入れられたわけではなかったが、天皇や皇后との直接のパイプを持つヴァイニングの提言を、東宮職が無碍にすることはできなかつたのではないかと思われる。

### ・東宮大夫の更迭

1948年、皇太子の中等科卒業を翌年に控えて、このまま高等科に進学するか、御学問所で個人授業を受けるかが再度問題として浮上した。ヴァイニングによると、御学問所を設立することに賛成の者は、先例によるという理由であるだけでなく、日本の高等科教育が大学受験のための詰め込み教育となりがちであること、そして英国のエリザベス女王も家庭教師によって教育を受けたということを根拠にしていた。一方、ヴァイニングは他の生徒と共に学ぶことが他の不利益に勝るとして、高等科進学を主張した<sup>132</sup>。

この問題が議論され始めた頃に、芦田均首相による宮内府改革が行われ、宮内府長官と侍従長の同時更迭という事態が起きた（第2章参照）。そして芦田は5月21日に、宮内府長官、侍従長の更迭の報告と同時に、天皇に対し「皇太子殿下の御教育も昔風をすて、自由奔放な教育を御願したい〔中略〕穂積は更迭させることを希望致します」<sup>133</sup>と述べた。

かつたようである。同書 56-58、130-131、144、246-247 頁にヴァイニングによる侍従達の人物評がある。

<sup>126</sup>小野昇『天皇記者三十年』読売新聞社、1973年、263頁。

<sup>127</sup>前掲『皇太子の窓』56-57頁。

<sup>128</sup>前掲『皇太子の窓』74頁。

<sup>129</sup>前掲『皇太子の窓』100、246、329、351頁。

<sup>130</sup>前掲『皇太子の窓』48-49、139、163頁。寺崎によれば、ヴァイニングは来日直後から親子同居をなぜしないのかという疑問を持っており、実際に寺崎が天皇に質問し理由の説明を受けている。前掲「寺崎日記」258頁、1946年11月27日。

<sup>131</sup>この点について直接の記載はないが、ヴァイニングは皇太子の自発性のなさ、不自由を不自由と思わない点に大いに不満を感じており、その立場から解放したいという願いがあった。前掲『皇太子の窓』61、96-97頁など。

<sup>132</sup>前掲『皇太子の窓』188頁。なお、おそらく御学問所設立に賛成であったであろう穂積は、退任前に田島道治宮内府長官に対して、皇太子は学生寮に入れた方がよいとの意見を述べている。このことから考えても、御学問所を設立していたとしても、学生との交流を重視する点は一貫していたのではないかと思われる。加藤恭子『田島道治一昭和に「奉公」した生涯―』TBSブリタニカ、2002年、251頁。

<sup>133</sup>芦田均『芦田均日記』第2巻、岩波書店、1986年、113頁。

天皇は、終戦直前に穂積を東宮大夫に任命し、皇太子に対して終戦の意味を教える役割を担わせていたことから考えても、穂積への信頼感は厚かったと思われる<sup>134</sup>。

なお、東宮大夫の穂積重遠は、1945年の皇太子帰京後に木下侍従次長から「大夫が時折御前に出て東宮御指導上、聖上と連絡をとられんことを勧む」<sup>135</sup>と話されているが、実際にどこまで行っていたかは不明である<sup>136</sup>。ヴァイニングによれば1949年1月になって初めて皇太子の顧問会（参与の集まり）が天皇の前で開かれたが、それまでは侍従長が天皇に年1回正式に報告するのみであったとしている<sup>137</sup>。ヴァイニングの記述が正しいかどうかはわからないが、確かに穂積は宮内府と意思の疎通がきちんとできていたようには見えない。東宮職設置時の学習院御用掛であった高杉善治によれば、穂積は暇さえあれば本を読み、夜中に見ると原稿を書いていたことが多く、常に勉強をしていたという<sup>138</sup>。穂積は東宮大夫就任中に5冊の本<sup>139</sup>を執筆していることから考えても、あまり強いリーダーシップを取らず、一人の教育者として皇太子に教えることのみを淡々とこなしていた可能性が高い。このような姿勢が芦田などの不満を強めた可能性はあるだろう。

また、新たに宮内府長官になった田島道治も、就任直後に「東宮大夫問題」として次のようなメモを残している。

（7）東宮大夫問題

- ・役目大事の積極性なし一責任回避の消極性あり
- ・気の利いた通俗話しの範囲
- ・東宮仮御所の行動
- ・部下心服せず
- ・後任にあつといふ人あれば更迭すべきこと
- ・客観的要件〇〇—主観的要件皆無<sup>140</sup>

そして田島は7月23日に初めて、元慶應義塾長の小泉信三東宮職参与に、東宮大夫への就任を依頼した。小泉は数度にわたって断るが、田島は執拗に小泉にこだわり続けた<sup>141</sup>。田島と小泉は特に親しかったわけではないが、安倍能成学習院長を初めとして共通の友人が数多く存在していたため、田島が宮内府長官に就任した際に、小泉は福沢諭吉の「帝室論」と「尊王論」を合本したものを贈って激励していた<sup>142</sup>。おそらく田島はこの本を読ん

<sup>134</sup>終戦直後の天皇から皇太子に宛てた手紙には、「穂積大夫は常識の高い人であるから わからない所あつたら きいてくれ」との文がある。前掲『平成の天皇』321頁。

<sup>135</sup>前掲『側近日誌』62頁、1945年11月28日。

<sup>136</sup>侍従の入江相政の日記を見る限り、穂積が天皇に直接話をしている形跡はない。ただし、入江の日記は全日分が公刊されていないこと、またそもそも侍従の事務が輪番制であることから、日記に記載のないという理由だけで面会が無いとは言い切れない。

<sup>137</sup>前掲『皇太子の窓』237頁。

<sup>138</sup>高杉善治『平成の天皇 青春の日々』読売新聞社、1989年、220-221頁（初版『若竹のごとく一戦争と皇太子殿下』1968年）。

<sup>139</sup>『新訳論語』社会教育協会、1947年、『新訳孟子』社会教育協会、1948年、『私たちの憲法』社会教育協会、1948年、『私たちの民法』社会教育協会、1948年、『歌舞伎思出話』大河内書店、1948年。

<sup>140</sup>前掲『田島道治—昭和に「奉公」した生涯—』208-209頁。

<sup>141</sup>田島によれば、小泉のもとに9回訪問するだけでなく、小泉の義兄松本丞治や、小泉の慶應塾長時代の慶應評議会議長だった池田成彬を通じて説得にあたり、ついに就任にこぎ着けたという。田島道治「小泉君を憶う」『小泉信三先生追悼録』「新文明」発行所、1966年、202-203頁。

<sup>142</sup>田島道治宛書簡（1948年6月21日）『小泉信三全集』第25巻上、文藝春秋、1972年、380頁。

だ上で、小泉がその任に適切であると判断したと思われる。結局小泉はその説得に応じ、福沢諭吉の精神にならって公職に就かない「常時参与」という形で教育の全権を担うこととし、東宮大夫には御用掛であった野村行一が就任することになった<sup>143</sup>。なお注意すべき点は、倫理の個人授業を担当していた武内義雄も退任し、小泉がその後を引き受けることになったことである。このことは、教育勅語を中心とした倫理教育が否定されたことを意味した。

小泉は、日本国憲法における象徴天皇制を意識した教育を行った。具体的な内容を挙げると、週2回授業を行い、新聞の日曜版の「週間サマリイ（展望）」を主題にして時事問題について議論を行ったり、本と一緒に読んだりした<sup>144</sup>。小泉は知識を教えるだけでなく、議論することに重点を置いた教育を行っており、皇太子はこの中で憲法と自らの活動との関係を学んでいったと考えられる。なお、小泉の教育内容については第5章で詳しく述べる。

この人事は、ヴァイニングにとって歓迎すべきものであった。自分に理解のある野村が東宮大夫になり、さらに後にはファーストネームで呼び合うような仲になる小泉が教育の全権を握ることになったためである。このため、ヴァイニングの教育も小泉達との調整の下に行われるようになった。つまり、日本国憲法下における将来の天皇の教育方法が、小泉の元に統一されたのである。また、小泉や野村はほぼ毎週1回傅育官会議を開いて教育方針について話し合い、時には義宮附の傅育官を混ぜたり、皇居や学習院で行ったりするなど、関係各所と調整しながら教育を行っていった<sup>145</sup>。

### ・小泉信三とヴァイニング

ヴァイニングは、皇太子が中等科を卒業した時点で仕事が終わり、契約切れと共に帰国できるだろうと考えていた<sup>146</sup>。しかし、小泉はヴァイニングを帰国させるつもりはなかった。常時参与就任直後の1949年3月16日、小泉は野村東宮大夫と田島宮内府長官を同席させた上でヴァイニングと会合を行い、ヴァイニングの皇太子教育に対する意見を聞いた<sup>147</sup>。また田島は、小泉も天皇も留任を希望していると語り、皇太子の英語力が強化されてきた今からが、ヴァイニングの教えた内容を受け入れられる時期なのではないかと述べた<sup>148</sup>。ヴァイニングは、同行していた姉の健康状態と、全てをヴァイニングのために捧げている秘書の高橋たねの今後の事を考えて、あと1年だけ更新を行うことを決めた<sup>149</sup>。

小泉の就任以後、ヴァイニングの行動への許容範囲が広がった。ヴァイニングと小泉は1948年3月に初めて面会したが、すぐに意気投合したようだ。高橋たねによれば、小泉

<sup>143</sup>なお穂積は最高裁判事に就任することになり、表向きは「栄転」とされた。

<sup>144</sup>小泉信三「皇太子殿下の御婚約」『小泉信三全集』第16巻、文藝春秋、1967年、519頁。

<sup>145</sup>宮内庁への情報公開請求で公開された東宮職の『事務日誌』には小泉や野村などが会議を行っている記載が散見される。例えば1950年の前半部から挙げてみると、1月10日（長官官舎）、16日、18日（皇居）、25日（皇居）、2月20日（侍従次長出席）、27日、3月6日（山田侍従出席）、29日、4月3日、10日、17日（義宮附出席）、28日、5月2日（学習院）、8日、22日、30日（義宮附、侍従次長出席）、6月5日、12日（義宮附出席）、19日、30日（学習院）、となる。なお会議開催の全てが公開されているかは確証がない（勤務時間外の会議は「私的な会合」として公開されていない可能性がある）こと、また事務官が記載を忘れたという可能性もあるので、上記したものが全てではないと思われる。

<sup>146</sup>前掲『皇太子の窓』264-267頁。

<sup>147</sup>前掲『皇太子の窓』258-259頁。

<sup>148</sup>前掲『皇太子の窓』264-265頁。

<sup>149</sup>前掲『皇太子の窓』266-267頁。

とヴァイニングは「エリザベス」「Shinzo」とファーストネームでお互いを呼び合う関係であった<sup>150</sup>。小泉の娘である秋山加代は「父がヴァイニング夫人につくすときは、頭の中が親切でフル回転しているようで、騎士道精神の権化というべきものであった。あまりにもよい子なので私たちは「ああ、ヴァイニングさんになりたいな」といったものであった」<sup>151</sup>と述べており、その親密さがうかがえる。小泉が皇太子のテニスの師である石井小一郎に送った書簡の中で、「僕は彼女が殿下の tutor に来てくれたのは天恵だと思っております。若し彼女が才能があつても、ハネカエリの出過ぎものであったなら、皇室も、延いては政府も、言ひようのない困却をしなければならなかったでせう。彼女を友として獲たことも、僕がよき友に恵まれてゐるその inventory を富ますものです。」と述べており<sup>152</sup>、小泉は人格的なものを含めて、全面的にヴァイニングを信頼していたことがわかる。

その信頼を表す出来事として、1949年6月27日の皇太子のマッカーサー訪問がある。この際に小泉は、皇太子をヴァイニングと二人きりでマッカーサーの下に赴かせたのである<sup>153</sup>。また8月になると、軽井沢に与えられていたヴァイニングの別荘に、皇太子が3日間単独で宿泊した。しかも彼女によれば、この試みは皇太子と侍従の側から出た案であった<sup>154</sup>。なおこの訪問以来、皇太子の毎年夏の軽井沢滞在は定例化した。小泉は、皇太子が軽井沢に滞在する際には、学習院以外の学生などとの交際を奨励した<sup>155</sup>。この交際は、特にテニスを通じて行われ、それが正田美智子との結婚につながっていくことになる。

翌年夏に、ヴァイニングは自分のできることがなくなったことを感じ、皇太子に帰国する旨を告げた<sup>156</sup>。そして10月に契約は終了し、後任に LARA (アジア救援公認団体) の代表の一人として来日していたエスター・ローズを選んだ。ローズは1917年から43年までクエーカーの学校である普連土学園で教鞭を執っていた知日派の一人であった<sup>157</sup>。そしてヴァイニングは、12月4日に横浜港からアメリカへ帰国したのである。

### ・高等科進学後の皇太子教育

1949年4月に皇太子は学習院高等科に入学した。設置するかどうかで議論になっていた「御学問所」は結局設置されなかったが、週4日を高等科、2日を個人授業にあてるという折衷案が採られた<sup>158</sup>。高等科一年の時の単独授業の教科と教員は、倫理：小泉信三（東宮職常時参与）、数学：杉村欣次郎（埼玉大）、国語：久松潜一（東京大）、西洋史：山中謙二（東京大）、日本史：家永三郎（東京教育大）、自然科学：小谷正雄（東京大）、坪井忠二（東京大、東宮職参与）、英語：エリザベス・グレイ・ヴァイニング、レジナルド・ブライス（学習院）、フランス語：前田陽一（東京大）、音楽：小松耕輔（学習院）、美術史：矢崎美盛（東京大）、田沢坦（東京国立博物館）、和歌：五島茂（歌人）、弓道：大内義一（東宮職御用掛）、であった<sup>159</sup>。

<sup>150</sup>筆者による松村たね氏へのインタビュー(2001年11月2日)。

<sup>151</sup>秋山加代『叱られ手紙』文藝春秋、1981年、221-222頁。

<sup>152</sup>石井小一郎宛書簡(1950年5月15日)、前掲『小泉信三全集』第25巻上、426頁。

<sup>153</sup>前掲『皇太子の窓』286-287頁。

<sup>154</sup>前掲『皇太子の窓』304-305頁。

<sup>155</sup>前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』327-328頁。

<sup>156</sup>前掲『皇太子の窓』378頁。

<sup>157</sup>エスター・B・ローズ記念出版委員会編・発行『クエーカーの足跡—エスター・B・ローズを偲んで—』1980年、409-414頁。

<sup>158</sup>前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』224-225頁。

<sup>159</sup>前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』224-225頁。

また、高等科進学と同時に、皇太子は週3回小金井の学生寮（光雲寮を改築した清明寮）に宿泊することになった<sup>160</sup>。高等科は目白にあったため、皇太子は毎日小金井の仮寓所や清明寮から通学することになった。寮生活を勧めたのはおそらく小泉だと思われる。小泉自身は寮生活を体験していないが、10代の頃に体育会でテニスに明け暮れており、友人と共に過ごす生活の重要性を認識していた<sup>161</sup>。ヴァイニングは小金井の不便さから、弟が住む皇居の義宮御殿で同居すべきと主張したが、友人達と一緒に過ごす時間を増やすということ自体は昔からの持論でもあったため、最終的に小泉の案に同意した<sup>162</sup>。

さらに、この頃から皇太子の海外留学について検討が行われた。前述の1949年3月16日の会合の際に、小泉とヴァイニングは講和条約締結後にアメリカと英国の双方に留学するべきであるという一致点に達した。また、教育が終わる前にするか後にするかも、話し合われた<sup>163</sup>。

その後、大学進学時に留学するかどうかが問題となり、ヴァイニングの帰国前に数回にわたり話し合いが行われた。1950年5月にマッカーサーと会談したヴァイニングは、「一年間はエクスター（米東部にある有名予備校）のようないい予備学校で勉強し、一年か一年半オクスフォードかケンブリッジの特別学生として英国を旅行する」ことを望んでいる事を話した<sup>164</sup>。これに対しマッカーサーは、皇太子の最終学歴が外国になることの危険性を説き、「国王がその王位を維持しているところでは、国王自身の人格と生活様式に理由があるのです」として、日本の教育制度の最高学歴である東京大学への進学を提案し、留学に否定的であった<sup>165</sup>。のちに、東宮職参与の一人であった坪井忠二は、「戦争で卑屈になっている日本人にたいし皇太子さまのみ留学されるのは芳しからずと私達が反対、学習院を選ばれたわけである」<sup>166</sup>と述べている。小泉がこの問題についてどのような見解であったのかは記録がないので不明であるが、坪井の述べるような意見に結局は同調したのだと思われる。結局、皇太子は1952年に学習院大学に進学し、1953年のエリザベス女王の戴冠式に出席する際に、半年間かけて欧米各国を旅行することで留学の代わりとした<sup>167</sup>。

1951年12月23日に皇太子は18才となった。皇太子は皇室典範第22条により「成人」となったため、以後、公式行事へ出席をすることになった。つまり、学校以外での実地での皇太子教育が行われていくことになる。大学では政治学科に属して他の学生と同様に授業に参加しながら、小泉などの個人授業も並行して行われた。しかし、1953年の半年間の外遊のために単位不足となり、大学を中退して聴講生となり、同学年の友人が卒業した1956年3月に聴講を終了した。また1955年10月には東宮仮御所に動物実験室が作られ、その後、生物学（魚類分類学）の研究を進めていくことになった<sup>168</sup>。

<sup>160</sup>前掲『学習院百年史』第3編、257-258頁。

<sup>161</sup>小泉信三「私が二十の頃」『小泉信三全集』第15巻、文藝春秋、1967年、283-285頁。

<sup>162</sup>前掲『皇太子の窓』256-259頁。なお、1949年年末に小金井の仮寓所が火災で焼失したため、皇太子は渋谷常磐松の旧東伏見宮邸に引っ越した。また、1951年4月には目白に清明寮が建設され、小金井から移転した。

<sup>163</sup>前掲『皇太子の窓』259頁。

<sup>164</sup>前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』240頁。

<sup>165</sup>前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』239-240頁。

<sup>166</sup>座談会での坪井の発言。『北海道新聞』1952年11月9日朝刊。

<sup>167</sup>なお、英国は皇太子に対して家庭教師を派遣しようとする計画を立てていた。詳しくは以下の本を参照のこと。工藤美代子『ジミーと呼ばれた日—若き日の明仁天皇—』恒文社21、2002年。

<sup>168</sup>成人後の教育については、前掲『天皇への道—明仁陛下の昭和史—』271-287、316-323頁参照。

### (3) 小括

本章は、皇太子の教育内容の変遷をたどりながら、その方針が政治状況に影響されて揺れ動いてきたことを論じてきた。

皇太子は軍国主義が色濃くなる1933年に誕生した。しかし教育方針は、その軍国主義からはできる限り遠ざけられており、結局皇太子は軍人に任官せずに敗戦を迎えた。皇太子は、御学問所において天皇になるための特別教育を行う予定であったが、GHQの反対があって設置は見送られたため、学習院の中で一般生徒と同じ教育を受けることになった。また、GHQと天皇の方針によって、家庭教師としてヴァイニングが派遣され、英語を通した民主主義教育が行われていった。その後、高等科進学の際に再度御学問所設置が問題になるが、宮内府改革に伴う東宮大夫の更迭などによって設置は見送られ、皇太子への特別教育は最低限に抑えられ、寮生活などを通して友人達とともに過ごすことで人格を陶冶することが重視されることになった。

昭和天皇は1947年6月、記者会見で自分の子供の教育について質問されたときに、「子供の教育にはまず立派な人格の完成をのぞんでいます。とくに国民の期待にそむかないような立派な人になってくれることを希望しています」と述べた<sup>169</sup>。そもそも、実際には、敗戦後の憲法改正により天皇制は政治権力を剥奪されたために、政治的にセンシティブな特別教育を行う必要性は無くなっていた。また、昭和天皇がまだ若く、退位する可能性もほぼ無くなったため、皇太子教育を急ぐ必要性も無くなった。これによって、皇太子の人格を陶冶することを重視する方針が取られていったのである。

このようにして、皇太子は高等科卒業までは、将来の天皇としての振る舞いを学ぶというよりはむしろ、自らが人格を陶冶することを求められていった。そして、その後、小泉信三によって、皇太子は将来天皇としてどう振る舞うべきかといった教育が行われていくことになるのである。

---

<sup>169</sup> 『読売新聞』1947年6月4日。